である．日々進化し，見方によっては変容しているからである．評者自身の狭い分野についてもさらに細分化した他部門のことは分からない．この点，坂井教授は，自身の専門分野を含めた基礎医学はもちろんのこと，臨床の諸分野にも細かな心配りをして，さらにその筆はコメディカルの分野にまで及んでいる．常人が容易になし得る技ではない．

第3は史料を実見することの困難さである．画像を視さえすればよいとする考えに評者は組みしない．確かにインターネットの発達普及によって，一次史料の閲覧は以前に比較すると飛躍的に容易になったことは確かである．にもかかわらず，評者は，医学史の研究の第一歩は第一次史（資）料を実見し，その場所に足を運ぶことであると考える．もちろん限界があろう．当然のことであるが，ともすれば等閑に付されがちである．謬見が流布している背景にはこのことが順守されていないことがあろう．この点，坂井教授は出来る限りこのことを実行されておられる．驚異的であるのは16世紀中葉からの稀覯本を含む100点以上の第1次史料を教授自身が所蔵されていることである．恐らく本書を読んで感ずる迫力，説得力，深みは，教授自身が医学の歴史に名を遺す原著の数々を実際に手にして執筆されたからであろう．評者自身，“本物を見ることの重要性”を認識して少部数ではあるが稀覯本を所有し，研究や学生に対する講義に活用したことがある．したがって，これを実行することがいかに難渋であり，しかし意義深いことであるかを十分理解できる．

坂井教授は1993年の「からだの自然誌」以来，数々の革進的な著書を世に問うて来た．それらによって多くの方々が多大の裨益を受けてきた．本書は坂井教授の一連の医学史関連の労作の頂点に立つものであり，日本の医史学界の水準の高さを示している．21世紀初頭のわが国の医学界にとっても金字塔である．

（松木　明知）

［医学書院，〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23，TEL. 03（3817）5600，2019年5月，A5判，648頁，5,800円＋税］

坂井めぐみ 著
『「患者」の生成と変容
――日本における脊髄損傷医療の歴史的研究――』

評者は整形外科医として過去，脊髄損傷（以下脊損）患者を扱った経験から本書を興味深く拝読した．また，医師ではない著者による医学史の視点からの記述は，脊損を客観視する意味でも参考になった．

本書は大きく2部に分かれ，脊損医療と脊損患者の歴史と脊損者による医療への関わりの現代史である．前者はさらに，「放置される身体」，「脊髄戦争患者の生成」，「治療・患者体制の形成と強化」，「社会復帰の論点化」，「パラリンピック東京大会のインパクト」，「リハビリテーションの再編成」，「標準治療と臨床研究」の章で構成されている．この第1部は整形外科医にとっては既知のことであるし，新奇なものは少ない．ただ医学史を学ぶ上においては，熟読に値するものである．ことに如何に脊損者の認識が過去世間で疎んじられてきたか，あるいは戦時中生じた患者の悲惨さ，この疾患の無情感などである．脊損に若いころから情熱を注ぎこまれ，評者が直接指導を受けた天児民和博士，本邦でのパラリンピック開催に尽力し半生を身障者の社会復帰に捧げた，中村裕博士などの名前が引用されているのは，両博士に評者が直接接しただけに，当時の様々のシーンが蘇ってきた．長期間臥床を余儀なくされた脊損患者との会話，慰め，感染・褥瘡の処置と導入が始まったばかりのリハビリテーション（以下リハ）など

空しく時間ばかりが経過した時期であった．

後半の第2部は「日本せきずい基金の設立と活動」，「臨床試験計画へのせきずい基金の関与」より成る．これは評者にとっても非常に傾聴に値するものであった．多くの難病はこれまでにもグループを創設して，社会への理解の訴えや相互利益と理解を高める機能を果たしている．公害病やハンセン病などにみられる通りである．評者にとって最も推進して欲しいのは，損傷の再生医療への取り組みである．もちろん，きわめて先進的なもので安易に考えることは禁物だが，将来の展望の中での光明はこの一点にかかっている．これには遅々としているかもしれないが，焦るあまりごり押しの圧力団体にはなって欲しくない．著者もこの問題を自分自身のこととして，私見を交えて「喫緊の課題」と力説して結んでいるが，慎重に見つめてゆく態度が最重要な態度であろう．

パラリンピックについて少し触れたい．評者は1962年中村裕博士とStoke Mandeville Hospitalに滞在し，脊損患者が6か月間のスポーツ活動を通じて85%の社会復帰を実現した事実を目の当たりにした．そして1964年東京オリンピックと同時に開催された第2回国際パラリンピックを先頭に立って誘致成功させた，中村博士の献身的な活動の詳述が欲しかったと思っている．大会当日の救護班員の一人として参加した評者にとっては，忘れることのできないイベントであった．2020年はわが国で第2回目になる国際パラリンピック大会が開催されるが，その蔭に身を削って身障者に寄り添って，「税金を遣って生活をするのではなく，税金を払える人となれ」をモットーにした中村博士の偉業を忘却してはならない．コングロマリットとなった「太陽の家」の設立，運営を成し遂げた博士の献身は脊損の歴史に大きく遺すべきである．

本書は引用文献が豊富で，細かい専門的なものも多数引用されているのに敬意を表したい．評者が過去参考にしたものも多い．著者自身が脊損者となられ，身をもって障害と闘われ，内容が充実した歴史書を世に問われたご努力を高く評価したい．江湖に一読をお勧めする次第である．

（小林　晶）

［晃洋書房，〒615-0026 京都市右京区西院北矢掛町7番地，TEL. 075（312）0788，2019年7月，A5判，314頁，5,200円＋税］

書籍紹介

新村　拓 著
『売薬と受診の社会史――健康の自己管理社会を生きる――』

日本の医史学の研究者には，新村拓氏が法政大学出版局から継続して出版してきた医療史シリーズに負うところが多いと考える．今回，売薬と受診を主題として新しく一書を出版されたので紹介したい．副題は「健康の自己管理社会を生きる」となっている．まず部・章をあげる．

第I部　近世の薬や・医者・病家
　第一章　高まる薬の需要　売り込みをはかる薬屋
　第二章　健康の自己管理社会に於ける病家の心得
　第三章　医生教育と医者の心得
　第四章　服薬と自然治癒の間で
第II部　近世の日記にみる医療行動
　第一章　相模国三浦郡大和田村の『浜浅葉日記』
　第二章　治病・防疫を祈願する人びと
第III部　幕末・明治期の日記にみる医療行動
　第一章　武蔵国橘樹郡長尾村の『鈴木藤助日記』
　第二章　湯治に込められた思い
第IV部　近現代医療の展開と売薬
　第一章　売薬に向けられた眼差し
　第二章　「調剤兼帯の医師」と調剤権の行方